

ニートと生涯学習社会について

佛教大学教育学部 教授 原 清治

hara@bukkyo-u.ac.jp

キーワード：ニート，ケータイ，生涯学習社会，学習と仕事のレリバンス

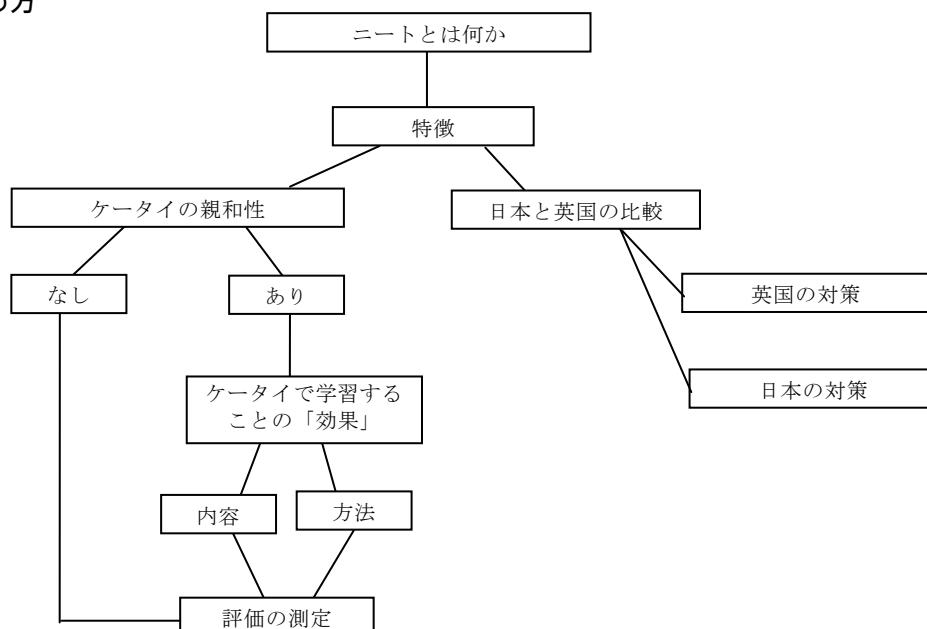
1. はじめに

最近の若者を表象する言葉に「三低」の時代の到来がある。それはすなわち、学力の低下、意欲の低下、規範の低下であるといわれる。なかでも、フリーターやニートが社会構造的に多くを占めるようになってきたことに対する危惧が、労働経済学や、雇用対策といった視点から語られることが多い。

そこで問題視されるのは、「学習（学習した内容あるいは、受けた教育の水準）」と「就職（仕事を得ることやその内容）」とどのようにつながるのかという点であり、その両者のレリバンスが疑問視されているのである。

本報告では、ニートの若者たちを、どのように学習に誘導するのかという「装置」としての「ケータイ」に注目したい。その際、ニートの若者たちが、ケータイ文化にどのような親和性を持ち、その学習の内容や方法、効果にどのような評価をしているのかといった実態を実証的に明らかにすることが求められる。そして、このようなニートの若者たちを学習に誘うだけでは問題の根本的な解決とはならず、それをいかに「仕事」へ結び付けていくのかといった視点がなければ学習は完結せずに、不整合を起こしてしまうことについても言及したい。

2. 論の進め方



本報告は、以上のような流れにしたがって発表していきたい。

まず、ニートとは何かをデータに基づいて明らかにすることである。その際、第1報告（山内）と重ならないように、とくに日本とイギリスのそれぞれの特徴について分析した上で、「日本型ニート」の特徴について言及する。ここで英国に注目する理由は、ニートという用語の「輸入元」であり、1990年代後半から、イギリス政府によって実態調査、ならびにその対策が先駆けて実施されてきた国だからである。さらに、それぞれの国におけるニートの特徴を比較するとともに、その対策がどのように講じられているのかについても簡単に触れてみたい。

一方、ニートの若者たちは、先行研究によると、ケータイなどのITやメディアに親和性をもつという報告も散見されており、それが本報告の端緒となっている。そこで、ケータイに対する親和性の「あり」「なし」を分析に投入するための変数とし、ニートの若者たちがケータイで学習することの効果が、どの程度あるのかについて、学習内容や学習方法の効果測定を行なってみよう。

最終的には、ニートの若者が、ケータイなどによる学習スタイルを利用することによって、キャリア形成への発動となるような学びが可能か否か、あるいはどのような学習内容がそれにふさわしいのかといった点にまで大胆に切り込んでみたい。

3. 日本と英国におけるニートの特徴の比較

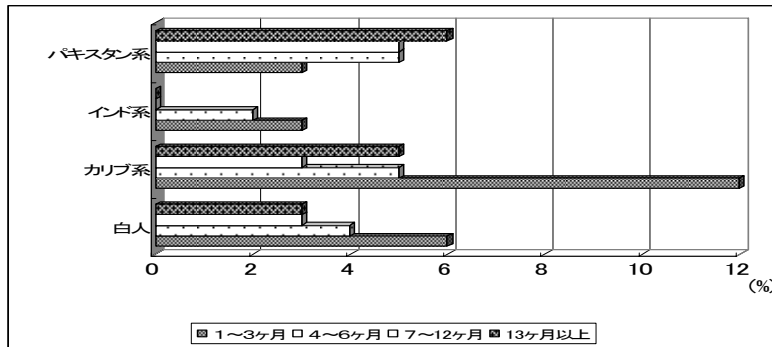


図1 民族別ニート期間総月数の割合

(資料) Social Exclusion Unit: BRIDGING THE GAP 2001 より作成

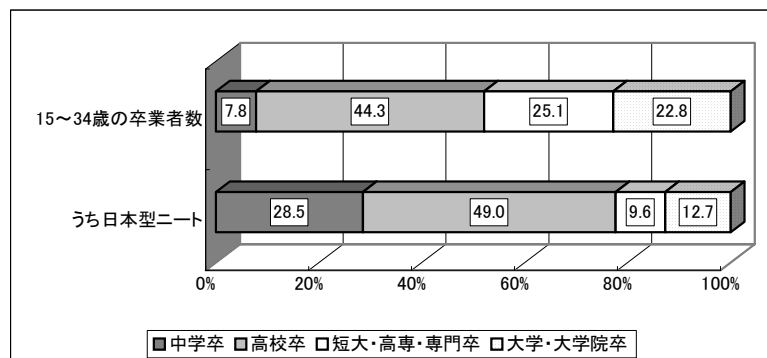


図2 ニートの学歴別構成

(資料) 小杉礼子「若年無業者増加の実態と背景」

『日本労働研究雑誌, Vol. 46』 2004 より作成

表1 偏差値・成績・性別とフリーター予定との関係

偏差値	成績	上のほう	やや上のほう	真ん中あたり	やや下のほう	下のほう	無回答	合計
上	男子	3.3	0.0	16.7	26.7	46.7	6.7	100.0
	女子	2.3	9.3	11.6	27.9	44.2	4.7	100.0
中の上	男子	4.4	4.4	15.4	22.0	48.4	5.5	100.0
	女子	7.4	11.1	26.9	24.1	27.8	2.8	100.0
中の下	男子	3.8	7.5	16.5	21.8	45.1	5.3	100.0
	女子	5.3	12.0	26.9	25.5	26.0	4.3	100.0
下	男子	9.9	15.5	16.9	26.8	28.2	2.8	100.0
	女子	13.3	14.4	21.1	18.9	25.6	6.7	100.0

(資料) 本田由紀「ジェンダーという視点から見たフリーター」

小杉礼子『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構 2002 より作成

4. まとめにかえて ケータイ学習は就職とのレリバンスを円滑に保つ装置となり得るかー

紙面の都合上、ケータイへの親和性を分析のための変数としたデータは当日に譲るが、ここでは、ニートの若者たちが生涯学習社会においてどのように学びを確立していくのかについて言及してみたい。

若年無業者の雇用問題をどのように解決すればよいのか、といった問題について、厚生労働省では「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」などにおいて、キャリア教育を中心とする教育政策がとられてきている。しかし、問題となるのは「学校で学んだ知識が就職の役に立つ」という言説に対する若者たちの否定感である。そうした若者の多くは、生涯学習社会においてこそ自らの学ぶ内容や方法を模索できるのであり、また、主体的に学びとっていく社会になればこそ、「本当の自分探し」が可能になるのではなかったのだろうか。生涯学習社会への移行が、実はこうした自己決定できない若者たちを量産してしまったのだとすれば、それは皮肉な結果であるといわざるをえない。こうした矛盾に一石を投じることができる「装置」がケータイ学習であることを、当日はデータを参照しながら詳述してみたい。